

【巻頭言】

年頭のご挨拶

会長 ^{かんざわ よしあき} 神澤 良明(43 回生)

明けましておめでとうございます。皆さまのご健勝とご多幸をお祈りいたします。本年もどうぞ学友会をよろしく願いいたします。

平成 23 年を振り返ってみると、1 月に霧島連山新燃岳の噴火活動によって宮崎県南部に大きな被害が出た。

3 月 11 日にはマグニチュード 9.0 の東日本大震災、それに伴う大津波により、約 2 万人の死者・行方不明者を出し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。その悲惨な状況はテレビに映し出され、多くの国民は何かの援助をしなければと思った。

阪神淡路大震災を経験した者にとってその苦しみは手に取るようにわかる。神戸でも震災後 15 年以上を経た今でも、多くの更地が目につく。

街の再開も進み、店舗用、住宅用の集合住宅も完成したが人が集まってこない現状がある。

東北地方の復興には 10 年から 20 年もの時間が掛かると思うが、あきらめずに立ち向かってほしい。復興は日本の国民的課題であると思う。

この震災、津波がもたらした福島原発の事故は放射線を取り扱う我々にとっても非常にショックな事であった。この事故は大量の放射性物質の放出を伴う重大な原子力事故に発展した。これにより、周辺一帯の福島県住民は長期の避難を強いられている。

2011 年は悲しいことばかりではなかった。私が眠れなく、ふと、テレビのスイッチを入れて見たのが、FIFA 女子ワールドカップの決勝戦であった。優勝候補のアメリカを相手に「なでしこジャパン」は必死で頑張った。でも必死さは見えてこなかった。楽しんで試合をしているように見えた。私は今まで女子サッカーに大して興味はなかった。多くの国民がそうであったと思う。神戸には INAC 神戸レオネッサというなでしこリーグのチームがあることすら知らなかった。このチームから「なでしこジャパン」に多くの選手を輩出しているらしい。

アメリカとの決勝戦、最後は PK 戦となったが、これを制し優勝。日本中の人々に感動を与えてくれた「なでしこ JAPAN」この優勝が日本に勇気、元気をもたらしたととても過言ではないと思う。

悲しいことがあって、この嬉しさが倍増したのかもしれない。

さて、昭和 2 年(1927)に島津レントゲン技術講習所が設立され今年(2012)は 85 周年を迎える。母校は種々の変遷があり、現在、京都医療科学大学として多くの学生が学んでいる。大学が 85 年史を纏めるにあたり学友会もお手伝いをしている。学園の歴史を調べるために「島津学園 70 年史」を読んでいて、学友会の設立の項に、『学友会の発足にあたり目的を「会員相互に親睦並びに誘掖を計り斯界の発展を期せん」とし昭和 3 年 1 月に計画され、講習所所長福田雋一を会長に選び 3 月中旬に設立された。学友会の設立は、全国各地より集まり、6 ヶ月間共に勉強し辛苦し親密になったに拘わらず、卒業してただ漠然と別れることなく、卒業後もますます親交を続け、相互の動静を知り、互いに研究の発表を知り合う機関を設けようとの第一回卒業生みんなの熱意によるものであり、会の構成は、生徒数の少ない学校であるが故に、卒業生だけではなく、在学生も一緒になった会とし、職員も共に会の活動に参加して家庭的な雰囲気をつつまでも保つていこうとの福田所長の主張に

よるものであった。』これを読んだ時に学友会のすばらしい点はここにあったのだということが判った。学友会は卒業生、在校生、教職員が一体となって作った、即ち三位一体の組織である。このことにより、他に例のない、単なる同窓会組織でない学友会が生まれたのである。

また、学友だよりについては『当時の会則の第四条には、「本会の目的を達する為に雑誌を発行し、且機宜の事業を行う」とあり、その条項に従って、昭和3年7月に、学友会雑誌という名称で第1号が島津レントゲン技術講習所学友会から発行された。』とある。

学友だよりも脈々と受け継がれ今回で202号である。この歴史の重みを感じずにはいられない。次の世代にこの歴史を伝えなければならない使命を感じる。

以上

* 通巻 202 号 2012 年 1 月 10 日発行(H23-No.4)より